

「いかに暮らすか・いかに生きるか」に関する統計

統計委員会基本計画部会第 3 WG

2008 年 3 月 12 日 (水)

嶋崎尚子 (早稲田大学)

- ・ 「暮らし」に関する統計領域：世帯、住居、家計、就業、余暇、介護、生活時間、地域など
- ・ 「生きる」に関する統計領域：出生、結婚、死亡など

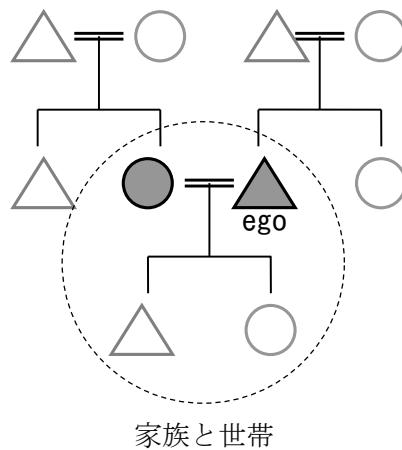
SSDS 社会生活統計指標

共働き世帯割合／一般世帯の平均人員／65 歳以上の親族のいる世帯割合／婚姻率／高齢夫婦のみの世帯割合／一般世帯数／全国一般世帯に占める一般世帯割合／高齢単身世帯の割合／核家族世帯の割合／単独世帯の割合／離婚率

1. 家族をどうとらえるか

(1) 統計における家族

- ・ 「世帯を同じくする者」「世帯を構成する集団」(センサスにおける単位)
- ・ 家族 = 住居と生計を共にしている人びと (かつ 「夫婦と未婚の子からなる家族」)



- ・ 家族構成 = 世帯構成

観察単位 (把握のながれ) :

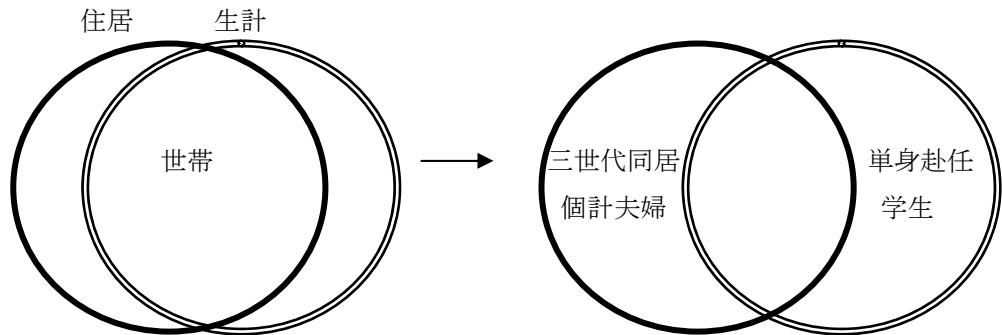
世帯	→	家族
世帯	→	夫婦
世帯	→	個人

例：「国勢調査」「全国家庭動向調査」「世帯動態調査」「住宅・土地統計調査」

cf. Eurostat 世帯 と 家族 (狭義の核家族) 1987 年勧告 No.131-132

(2) 世帯の定義

- 一般世帯「住居と生計を共にしている人々の集まり又は一戸を構えて住んでいる単身者」
- 常住者：3ヶ月以上にわたって住んでいるか、又は住むことになっている者

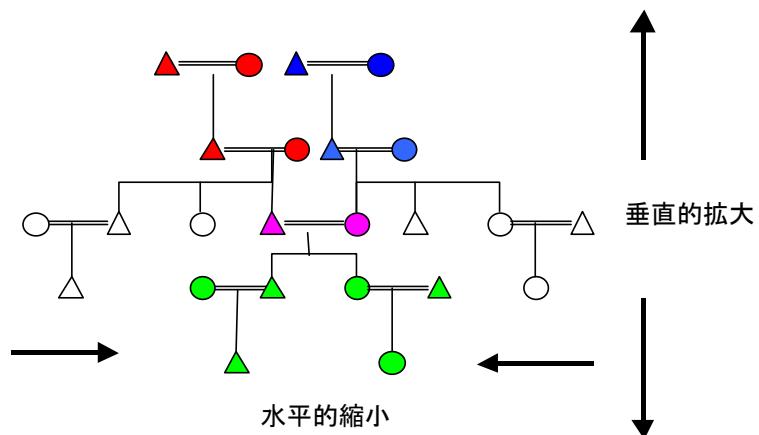


- 条件：住居と生計で十分か。

cf. Eurostat 居住単位 と 家政単位

(3) 人びとの関係 1：福祉政策等における含み資産としての家族・親族ネットワーク

- 長寿化と少子化による世代関係の水平的縮小と垂直的拡大



- 世帯外の家族情報

(4) 人びとの関係 2：結婚・婚姻・離婚

- 結婚と婚姻の統計間の整合性（第3WG 第1回会合で指摘済み）
- 既婚別居、未婚同棲の把握

(5) 児童と65歳以上に注目

- 15歳未満を含む世帯、65歳以上を含む世帯に焦点が集中している。
- 65歳以上のカテゴリ一細分化が必要か。

(6) 標準家族世帯モデル

- いかに暮らすか、いかに生きるかについては、標準家族世帯（サラリーマンと専業主婦からなる核家族）がモデルとされてきた。

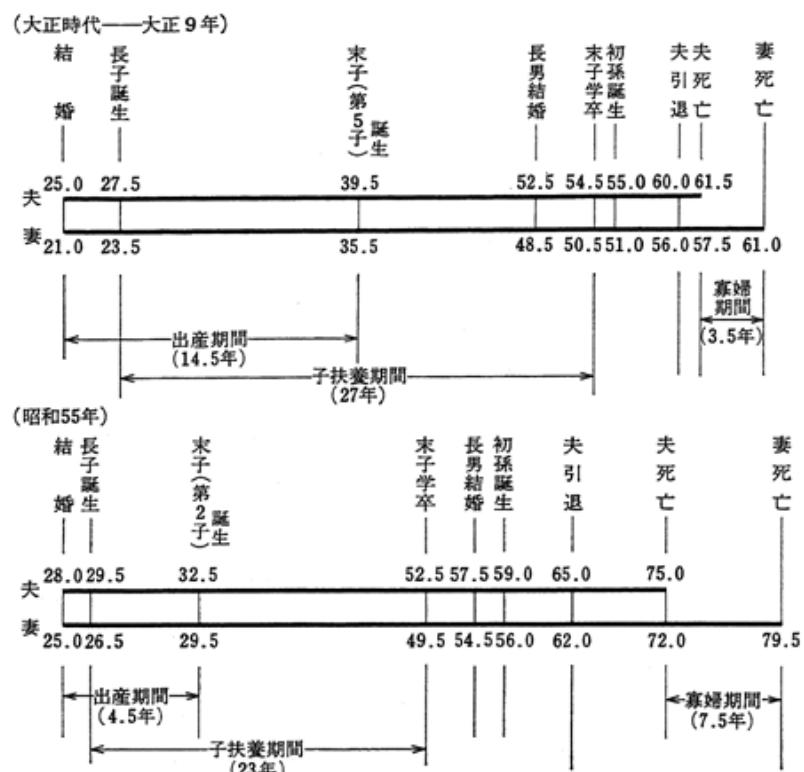
(7) ジェンダー統計

- 世帯主でない女性に関する情報は十分か。

2. ライフサイクルからライフコースへ

- 「いかに生きるか」のモデルとして登場したライフサイクル・モデル
単位：夫婦 期間：結婚から妻死亡まで
- 平均像を実際にたどる者たちがどれほどか。
たとえば、生涯未婚者、共働き夫婦、子どものいない夫婦、寡夫、巣立たない子ども

第1-2図 ライフサイクルの変化



資料：人口問題審議会意見書（昭和59年）

(注) ライフサイクル上の出来事が起こる年齢はすべて夫婦の結婚時を起点に計算しているので、例えば、寡婦期間についても、現実に夫と死別して寡婦として過ごす年数と比べれば短くなっている。

『厚生白書』昭和59年版 より転載。

- 個人を単位としたいくつかの社会的ライフコース・パターンの析出
- コーホート分析（第3 WG 第1回会合で指摘済み）
- パネル調査：個人単位、世帯単位、親子単位

例：「21世紀出生児縦断調査」「21世紀成年者縦断調査」「中高年者縦断調査」
世帯パネル調査：PSID（家計動態）

3. ライフイベントをいかに把握するか。

出生
学卒
就職
離家
結婚、離婚、再婚、別居
子どもの出生
子育て
親の介護
親の死
配偶者の介護
配偶者の死
本人の介護
本人の死
転居
持ち家取得
など

以上